

* 関 勝 則 「時代を映した横浜の歌」 探訪。

《13》 いしだ あゆみの「ブルーライト・ヨコハマ」

高度成長期への突入とともに、横浜港は大型港湾化が進みました。1963(昭和38)年に山下ふ頭が建設され、本牧ふ頭の工事も着工。この頃から海上輸送は経済的で効率的なコンテナ輸送が主流になりました。

人口が急増し、市郊外での団地や宅地造成が行われ、ベッドタウン、ニュータウンとしての新たな横浜の都市像が形成されていく中、昭和43年、横浜市が人口が200万人に達した年に、新しい横浜のイメージをつくる歌「ブルーライト・ヨコハマ」が登場、当時20歳だったいしだあゆみが歌い大ヒット曲となりました。作詞の橋本淳はこの曲のイメージを「港の見える丘公園から見た横浜、川崎の工業地帯の夜景と、自身がかつて見たフランスのカヌアの夜景を重ね合わせたもの」といっています。

この時代は学生運動の真ただ中、政治運動と新宿を中心としたヒッピー、フーテン、アングラ、サイケといったアンダーグラウンドな若者文化が交錯。グループサウンズの全盛期でもあり、高石ともやの「受験生ブルース」、岡林信康の「友よ」、ザ・フォーク・クルセダーズの「帰って来たヨッパライ」など、フォークソングの創世期でもありました。

しかし歌謡曲といえば、不幸をテーマにしたものや、貧しい暮らしの中から生まれた人情ものが中心の時代、作詞の橋本淳は「希望に満ちた未来の幸せより、今あるほんのひとときの幸せにしたかった、それが時代にマッチしたのでしょうか…」とこの歌について語っています。

平成21年、横浜港開港150周年を記念して開催された「開国博Y150」に向けて、実施されたご当地ソングのアンケートでは、2位の童謡「赤い靴」を大きく引き離して、「ブルーライト・ヨコハマ」が第1位に輝きました。ほぼ同時期に朝日新聞が会員サービスで行ったご当地ソングの全国アンケートでも、「知床旅情」、「津軽海峡・冬景色」に次いで、3位に入っています。それまでの横浜の歌の定番であった汽笛、マドロス、波止場、異国情緒といった雰囲気や、京急横浜駅1番線の列車接近案内メロディとして利用者の耳を和ませています。



発売当時のレコードジャケット



JICA横浜センターを視察

7月13日に国際・経済・港湾委員会のみなとみらい21地区にある独立行政法人国際協力機構(JICA)横浜センターを視察しました。横浜市では様々な事業をJICAと連携して行っています。今号はその取組について紹介します。

◆国際協力機構(JICA)の役割

世界との繋がりの中で生きる日本は、世界が安定し繁栄することは、わが国の国益そのものであり、日本の経験や知見を世界の貧困削減や経済成長に活用できれば、日本の存在感が高まります。そのため、政府や地方自治体、民間企業、市民社会、大学、研究機関等と総合的な開発協力を実施し、日本自身の成長発展に資する国際協力を進めています。

◆JICA横浜センターの事業紹介

① 研修員受け入れ事業 開発途上国の国づくりの中核を担う技術者や行政官を対象に、日本の技術や経験を共有するため、毎年100の研修コースで600人以上の研修員が神奈川県や山梨県で学んでいます。横浜市とは2011年から自治体で初となる包括連携協定を締結。アフリカ開発会議の開催都市として対アフリカ開発支援策として、水道、港湾、職業訓練、女性企業家支援等の分野で研修員の受け入れを実施しています。

② 市民参加協力事業 開発途上国での活動の紹介や国際協力に関する情報提供などを行っています。開発教育支援として、学校や自治体、市民団体の方々に対し教師海外研修や高校生向けの国際理解セミナーを実施。草の根技術協力としてインドネシアやブラジル、フィリピンにおいて子育て体制の強化や防災力の向上を支援。また国際協力活動への参加および理解促進を目的にセンター内にてイベント等を開催しています。

③ 移住者・日系人支援事業 中南米諸国の日系社会は各国と日本との友好・協力関係の基盤となっており、日系人の人材育成と海外移住の歴史や日系社会の理解促進を通じて現地社会の活性化を目指します。新天地でたくましく生きた移住者たちの姿を学ぶことのできる海外移住資料館をセンター内に併設し、移住者の足跡や日系社会を多くの来館者に伝えています。

④ 中小企業支援・民間連携 世界各国は持続的な成長の維持、貧困、気候変動、食料、資源といったグローバルな問題に直面しています。これらの問題解決に向け、民間企業との連携を強化し、途上国とのネットワークを活かしながら、中小企業の海外展開をサポートしています。また、企業の社員を青年海外協力隊やシニア海外ボランティアとして途上国に派遣しグローバル人材を育成しています。

⑤ ボランティア事業 JICAボランティアが約80か国で活躍している中で、横浜センターからは4000人を超えるボランティアが派遣されています。そうした方々の思いと開発途上国の人々の笑顔を結ぶお手伝いを進めています。